

曲目解説

通称「ジュピター」と呼ばれる交響曲は、言うまでもなくモーツァルトの交響曲としては最後の作品であります。1788年6月から8月にかけて、わずか2カ月余りの間に、39番、40番、そして今夜演奏いたします41番という優れた3つの交響曲を次々に完成させました。ほぼ同時期に作曲されながら、この3つの交響曲は全く異なった雰囲気を持ち、モーツァルトの「三大交響曲」と呼ばれ、演奏会でもしばしば取り上げられます。モーツァルトは、これ以降、その死に至るまで3年間作曲活動を続けますが、交響曲は作曲しませんでした。「ジュピター」という名は、もちろんモーツァルトがつけたものではありません。誰が名付けたのかは、不明ですが、この曲の格調高く、力強い雰囲気にぴったりであるとは言えます。

バレエ「くるみ割人形」は、ドイツの文豪E・T・Aホフマンの童話をバレエ演出家として有名なマリウス・ペティパが脚色したもので、1892年12月17日に、ペテルブルグのマリンスキー劇場で初演されました。チャイコフスキーのこのバレエは、変化と色彩に富み、クリスマス時期のバレエの演目として多くのステージで上演され、ヘンデルの「メサイア」、ベートーヴェンの「第9交響曲」とともに、年末恒例のプログラムです。組曲は、そのバレエの中から8曲が作曲者自身によって管弦楽演奏会用選ばれ、編まれたものです。

「小序曲」チェロとコントラバスが省かれ、軽快で浮き立つような感じの曲です。

「行進曲」子ども達がクリスマスに浮かれ、はしゃぎまわっている様子が描かれます。

「金平糖」当時発明されたばかりのチェレスタを巧みに使った、幻想的な曲です。

「トレパーク」チョコレートの精が踊る陽気で激しい踊り。

「アラビア」コーヒーの精の踊り。物憂く、妖艶な雰囲気が醸し出されています。

「中国」お茶の精の踊り。低音の単調なリズムに乗って、笛が駆け回ります。

「葦笛」フルートの跳ねるような動きと流れるような中間部の対比が際立っています。

「花のワルツ」第2幕お菓子の城の場面のハイ・ポイント。全ての花が舞い踊ります。

「サムソンとデリラ」は旧約聖書に基づいた歌劇。「バッカナール」は酒神「バックス」に由来する熱狂的な音楽を指し、この歌劇では第3幕、ペリシテ人たちが勝利を祝って踊るもので、美しい中間部と圧倒的な迫力の終結部を持つ力作です。